

京都大学	博士（文学）	氏名	祝 世潔
論文題目	凝視される身体、虐げられる身体 ――張資平の作品における「身体性」をめぐって		
張資平は中国新文学（五・四運動以後の白話文による中国現代文学）の歴史的文脈で語るには些か厄介な人物である。 彼が後世に名を残したのは、郭沫若や郁達夫と同じく、初期創造社における重要なメンバーであり、20・30年代の人気恋愛小説作家でもあるからだ。しかし、売れっ子小説家として人気を博する一方、彼に対する批判の声も30年代から次第に高くなり、青年読者に媚びる下品な恋愛小説を量産する職業作家というマイナスのイメージが定着していく。それに加えて「漢奸」のレッテルまでも貼られるようになる。彼は文学・政治・金銭の交差する中で混沌とした色に染められ、「啓蒙」と「革命」という現代文学の文脈では、常に曖昧かつ戸惑いの視線を向けられることとなった。 先行研究では、張資平の小説は主に「千篇一律な構造」と「過剰な肉欲描写」の二点をめぐって批判される。また彼は文学創作の際、「観察」という態度を取り、作品が「写實的」で「自然主義」の技法を採用していると評され、日本の自然主義文学から栄養を吸収したと考えられている。 しかし、先行研究には以下のような不足点がある。まず、身体を道徳に結びつけることにより、肉欲の過剰な表現という批判も、性の解放を通じて古い性道徳に抗う反抗精神という再評価も、根底にある身体性を見落としてしまう傾向が見られることである。また、張資平の小説を「千篇一律」だと批判はするが、実際には各作品間の呼応関係を見逃しがちであり、テキスト自体の考察が十分に行われていない。また、「自然主義」の日本要素を論ずる際、日本文学のみが考察対象となり、張資平が日本に留学した10年間の見聞に含まれる身体体験をおろそかにしてきた。 張資平の小説では、「性的身体」が大きな役割を担っている。欲望に苛まれ、快楽に溺れ、苦痛を感じ、病気にかかる主体として、「身体」は張資平の描き出した恋愛・肉欲・苦痛を結びつけるキーワードであり、張資平作品の根本的な拠り所でもある。本論では、「身体」という視座を通じ、張資平の書いた「愛」と「生」の実態を追求し、革命・都市・近代化など様々な脈絡で彷徨っていた張資平の心境の一端を明らかにする。 第一章「身体の実」を写す」では、張資平の「科学的観察」は一体どこに向けられたのか、またそれは彼の「肉欲」に溢れると批判された小説描写とどのように関わっているのかについて解説する。 まず、「苔莉」の表現手法を通し、身体を外部から伝わる客観的情報の受け皿として傍観する視点を考察する。張資平と同時代の文学者の多くは、精神恋愛を崇め奉る			

時代風潮の中で、主に快楽や苦痛などの主観的感情に注目したが、張資平の場合は、身体感覚のほうに目を向けただけでなく、外部の刺激を受け取る身体と、主観的感情との間にあるはずのリンクを敢えて切断することにより、身体の物理的反応をあたかも傍観者かのように観察する表現を獲得している。

次に、このような身体への関心の由来を追求する上で、日本文学の直接的な影響ではなく、日本留学中の身体体験および身体に関する時代の風潮を取り上げる。1912年から1922年まで、張資平は大正期の日本において女学生や女給らから感覚的で身体的な体験をしている。また、大正の恋愛ブームや性科学ブームのなかで、男子学生の身体は性科学と性教育の対象として位置付けられ、身体の欲求に対する「科学的」な注目が以前にも増して高まっていた。張資平が恋愛の場面を描写する際、常に身体の反応に注目するのは、明治から大正までに形作られた社会のトレンドに呼応したものと考えられる。

最後に、「沖積期化石」に設けられた自分の外にある「私」という構造を解析し、「傍観者の視線」から見える張資平の独自性を明らかにする。

張資平は「我」から一步離れた距離に立ち、「我」というものを冷静に眺め、自分の全ての感情や欲望を冷徹に解剖する。張資平の作品における恋愛のパターンが「千篇一律」と批判されるのも、科学的アプローチへの執着的とも思えるこだわりが一因かもしれない。一般的に、恋愛は「自己」の解放や「個」の精神と関連付けられるが、情動や欲望などの身体的要素がより支配的であるとすれば、科学的な規則が存在し得ることになる。このように恋愛が科学化されることで、個々の「事」から体系的な「物」へと変化し、結果として個性が失われる可能性もあろう。張資平が身体感覚に注目するのも、恋愛の場面におけるリアクションの類型化も、「科学的」な恋愛を表現する意欲から生まれたものと見なすことができる。

第二章「張資平の恋愛哲学（上）：「愛」に懐疑の目を向けて」では、愛の宗教であるキリスト教への懐疑と、「愛」の表現に潜む虚偽性に対する冷ややかな態度を明らかにする。

まず、第一節では、キリスト教教義の「赦し」や「愛」への反逆の姿勢を論じる。先行研究では、張資平は教会の信者たちを偽善者として否定する一方で、教義自体には反対していないと指摘される。しかし、彼の作品ではキリスト教の基本教義を嘲笑うかのような表現が散見される。例えば、神聖な礼拝堂を肉欲に溢れる場に変えることは、肉欲を戒めるキリスト教の教義を嘲笑する態度と言える。また、「懺悔」を実用主義的な戦略、赦しを強要する脅迫、精神的な免罪符として濫用し、キリスト教の「懺悔」と「赦し」の制度に根本的な拒否と嫌悪を示す。さらに、聖書に基づいて構築する恋愛の受難者物語への妄想も無慈悲に打ち砕く。張資平はキリスト教の基本精神に対して深い不信感を抱いていると考えられるのだ。

第二節では、「愛」という主張の裏に潜む虚偽性を指摘する。情熱的なラブライター

で恋愛の演出をする場合にも、「愛」という表現は心情の虚偽性を隠すベールになり得る。自由恋愛や恋愛神聖の主義主張を揶揄し、恋愛の「自由」を享受できるのは男性のみであり、恋愛の苦汁を飲むのは女性であるという現実を、繰り返し呈示している。

第三節では、「苔莉」という作品を例に、張資平の作品で表現された「霊」と「肉」の複雑な関係性を探求する。霊的な愛に至るためには、肉の欲望が唯一の通り道であることを示唆し、「純潔な愛」というイデオロギーの虚偽性を冷笑する。愛が肉体的な欲望を介さなければ表現できないと主張する一方、肉体は脆弱で変わりやすいため、愛を求める心も虚しいまま満足できない。この不安定な霊肉観こそが、張資平の作中人物が常に欲望に塗れているようでありながら、精神的空虚さを感じる理由だと考える。

第三章「張資平の恋愛哲学（下）：「愛」より「生」」では、「恋愛」のために自分を捧げることをせず、「愛」ではなく「生」を選ぶ女性たちの奮闘に注目する。

第一節では、張資平の作品のなかで、「女学生」という新しい女性の身分がどのような視線で捉えられているかを考察する。女学生は、日本より舶来した女学生幻想のもとに、「性的放縦」と「良妻賢母」という二面性を負わされていたが、張資平は、単に嫁入りの資格を狙うための女学生や芸者のような立場に置かれた女学生を提示することで、彼の偏見が作品中に浮き彫りにされる。

第二節では「最後の幸福」を取り上げる。新文学における女性はいよいよ哀れな被害者か勇敢な反逆者として登場するが、張資平が描く女性は、単純な被害者や反逆者の側面だけではなく、伝統と革新の隙間を逆手にとり、新旧の道徳にとらわれず、父権社会の中で生き抜くために利用可能な手段をすべて駆使して交渉する。結局は多くが失敗に終わってしまうのだが、彼女らが持つ生存本能は生き生きとした人間性の輝きを放っている。「最後の幸福」の美瑛がその一例で、父権制を欲望の後ろ盾にしながら、女性の欲望を堂々と主張している。美瑛の欲望は強い身体性を帯びており、身体が彼女の行動の原動力になっている。他者による束縛や示唆ではなく、内的な欲求によって行動するという女性像は、「個」の異彩を放っている。

第三節では「長途（長い道のり）」を取り上げる。「長途」は、田舎から出て冷酷で汚濁な都市に身を寄せる碧雲が、人生の活路を模索する「長い道のり」の話であり、生きる道を模索する女性が、些かなりとも安息を求めるために男性優位の社会に迎合し、却って獲物として狙われてしまう不運な物語で、一種の「都市文学」として読むことができる。碧雲は何人かの男性の間を転々とするも、はっきりと「恋愛否定」を宣言している。張資平のこれまでの女性墮落物語とは異なり、碧雲の人生選択は男性に対する愛や欲望によるものではなく、生きるためのある種の合理的な判断に基づいている。

第三章に挙げた女性は、利己主義に映るかもしれない。しかし、彼女たちの身体重

視・欲望重視は明確に「自己」が存在する証拠でもある。彼女たちにとって、利己主義を主張することは、男性中心の社会に挑んで生き残るための手段の一つであった。

第四章「恋愛結婚の末路、苦難の「妻」——張資平の身辺小説」では、ずっと看過されてきた張資平の「身辺小説」、特に「妻」という女性群に注目する。五四後に自由意志で結ばれる近代的核家族の中でなお重荷を背負っている妻や、伝統的な大家族の桎梏からは解放されても、都市化や政治変動のなかで揺れ動く夫婦の関係性を考察する。さらに、身辺小説を恋愛小説とは別のジャンルとして分断するのではなく、恋愛・結婚・伴侶の関係性という問題系の一貫性より、恋愛小説の延長として解説する可能性を探る。

第一節では、「小兄妹」を通して、都市の中で孤立している近代家族における女性の出産・育児・家事の負担を描き、近代家族の不安とその中でより一層大きい負担が課せられた「妻」の桎梏を呈示している。

第二節では、「百事哀」を通して、自由恋愛で結ばれる家庭の行く末の無情さを提示し、五四の自由恋愛結婚熱に冷や水をかけるかの如き張資平の表現について分析する。

第三節では、女学生から「良妻賢母」へ凋み、都市の中の一室に閉ざされ、職業や生家などの道が全て塞がれ、夫の庇護に縋り付き活路を乞うしかない妻の苦境を炙り出す。

第四節では、利己主義で暴力を振るう夫の「悪」を、言葉を憚らずに暴露する張資平の筆致には、田山花袋『蒲団』の心境描写を模倣する「偽悪的」な痕跡が見られることを論ずる。夫は妻を酷使する家庭の暴君であると同時に、妻子を守る家庭の大黒柱でもある。「家族の集団性の強化」という近代家族のもとで、家族成員は強力なつながりを持つ一方、閉ざされた過剰に肥大した親密な人間関係のなかでは、恒常的な衝突を起こすのである。

張資平の身辺小説は、家族の反対を退け、自らの自由意思で夫婦睦ましい近代家族を築いた女学生の妻が、貧困生活のなかで妊娠・出産・育児・家事からの過労に苦しみ、利己主義の夫に搾取され、最終的にすべての逃げ道が塞がれる、という女性の悲劇に注目する。恋愛結婚の「そのあと」の議論が避けられている当時の時代風潮に相反して、張資平は恋愛結婚その後の不毛な家庭生活を赤裸々に描く。恋愛問題についても夫婦の権力関係の不均衡を提示し、結局は女性側のみが従属的立場に置かれることを暴き出す。

第五章「張資平の恋愛小説と「病」」では、張資平の恋愛小説における「病」のイメージを取り上げ、肺結核や婦人病に反映される張資平の文学観を論じる。

男の結核は張資平の作品によく登場する。張は厭な口臭・見苦しい欲望・精神の狂乱という三点をもって、新文学の世界で高尚かつ美しい結核のロマンチックなイメージを逆転させ、肺結核を醜悪な欲望が身体に投影する隠喩とする。

一方、女性の場合は、ヒステリー・性病・婦人病・妊娠・流産などに苦しめられる。性的な苦悶や夫婦関係の不満は女性にヒステリー症をもたらすが、性的放縦もまた女性に花柳病や婦人病を招いてしまう。張資平によれば、女性の欲望は子宮に由来するが、欲望が病を招き、その病は女性の子宮に帰結する。女性は子宮を持っている以上、欲望も病も免れない運命にある。張資平の「女性＝子宮＝欲望＝病」という論理は、十九世紀のフランスの臨床医学における、女性の病気を子宮に還元する「科学的」言説に呼応する。

張資平は病を性的不道德を裁く最後の手段として取り扱っている。道德そのものが相対化された時代では、いかなる道德批判も正当性を欠く上に、時代遅れの説教に見えてしまう。身体の欲望に耽った人物にとっては、身体という次元の罰が最も効果的で逃れられない。

また、病は欲望が身体に現れる投影であり、人間はあくまでも欲望に左右される受動的な客体である。つまり、人間の肉体は欲望に支配される客体であり、欲望が引き起こした罪によって罰せられる運命から逃れられない、というペシミズム的な人間観にたどり着く。

張資平は終始個人の身体を革命の枠組み内に収めることはしなかったが、近代的で自由な身体観を鵜呑みにすることにも幾分の抵抗を示している。結局、伝統と近代の狭間で身体と欲望の出口が見つからず、「病」という逃げ道で道德批判を下すことになる。

終章では、張資平の小説のなかで、女性に注目する際に二つの矛盾するまなざしが存在することを提示する。張資平は「観察的な視線」で、女性の身体を凝視するのだが、従来指摘されるように女性を性的モノ化、セクシュアル化する視線のなかに、もう一つ異なる眼差し、つまり、女性の身体が虐げられる実態から目をそらさない視座も存在するのである。このような「身体」を凝視する視線の複層性が、張資平文学の複雑さであり、読解する上での一つの指標であることを述べる。

（論文審査の結果の要旨）

本論文が扱う小説家張資平（1893-1959）は、日本在住の中国人留学生を中心に設立された文学集団創造社の初期メンバーの一人として知られる。1912年に来日、第五高等学校を経て、1922年に東京帝国大学理学部地質学科を卒業した彼は、東大在学中の1920年から陸続と小説を発表し、恋愛小説作家として多くの青年読者を獲得した。しかし、その赤裸々な肉欲描写に対しては魯迅など同時代知識人からの批判も多く、加えて、1938年以降は日本さらに汪兆銘政権に協力し、第二次世界大戦後に「漢奸」として有罪判決を受けた経歴から、その作家活動や作品への研究は長く停滞したままであった。1990年代以降、再評価の流れは生まれていたが、その多くは、古い性道徳を打ち破り新しい性道徳を先取りしたなどの、理念的側面からの評価が主流となっている。本論文は、上記のような理由から肯定的な評価を下しにくく、知名度の割に過小評価されてきた張資平について、その文学がもつ独自の立ち位置と功績を改めて検討する試みである。特に、その観察眼に対しては同時代人からも毀誉褒貶が分かれてきた張資平の、身体を凝視する眼差しを手掛かりとして、新しい評価軸を打ち出そうとした点に本論文の真骨頂が有る。以下、論文の構成に従って、各章において達成した点を述べる。

第一章「身体 of 「実」を写す」では、張資平の観察眼が暴く肉欲描写の特質を、代表作の「苔莉」の表現手法を中心に分析する。論者は、細部にわたって詳述された身体的事象が「把」構文や使役文の主語に置かれ、それが別の身体反応に作用を及ぼすことを淡々と記す文体上の特徴に着目する。そしてそれを創造社の同人で、同じく赤裸々な性欲描写で知られる郁達夫の身体表現と比較することを通して、張資平の観察眼の基調には、傍観者の視線が存在することを指摘した。この視線により、張資平の小説には、自我から析出されたもう一つの「我」の居場所が生まれるとの指摘は、以後の分析の大きな基点となっている。

第二章と第三章は「張資平の恋愛哲学」を論ずる。上篇に当たる第二章では、キリスト教教会学校で幼少期を過ごした張資平の内心に潜むキリスト教教義への疑念について、「約檀河之水」「上帝的兒女們」「聖夜節前夜」「愛之焦点」などの作品群に現れる「赦し」「懺悔」などのキリスト教的要素への描写を手掛かりに分析し、それらの描写は、キリスト教教義への拒否・嫌悪を示していることを明らかにする。張資平のキリスト教教義への拒否や嫌悪は従来見落とされてきた事象であり、それが愛の虚偽性に対する冷徹な視線と共鳴することを明示し得たのは、論者の大きな功績である。

下篇に当たる第三章は、女の生と肉欲への視座を論じる。当時、女学生は自由恋愛に生きる新女性の一類型として注目を集め、多くの作家が、往々にして性的に墮落し自己壊滅の道を歩む存在として女学生を描いた。論者は、張資平の描く女性たちが常に生存欲求を優先して生きることに注目し、たとえ結果的に破滅の道を歩んだとしても、自らの身体を資本に人生を選択する有様は、彼女らの生々しい人間性を捉えていると論じる。張資平は、時にしたたかに時にやむを得ず、破滅への長い道のりを歩む女性を、徹底した傍観者の視線で克明に描くことで、父系社会の醜悪さやそこに潜む偽善を暴き出

す。女性の身体に注ぐ張資平の眼差しを指標軸とすることで、描かれた女性の身体に、破滅と生存欲求の併存というパラドックスが宿ることを明らかにした論者の分析は、説得力を有する。

第四章「恋愛結婚の末路、苦難の「妻」―張資平の身辺小説」は、従来看過されてきた張資平の「身辺小説」を分析対象にする。論者は、身辺小説を恋愛小説と連続して読むことによって、恋愛の「その後」を描くジャンルとして身辺小説を位置づけることが可能だと主張する。代表的身辺小説である「寒夜」では、女学校を卒業せずに嫁いだ妻が、学問の話になるたびに、人生は辛いと夫の前で苦笑するのだが、これを第三章で論じた女性の燃えるような生存欲求と相互参照することで、張資平のジェンダー観・批判意識が、当時にあっては異質の光を放つことを浮き彫りにする。論者の独創性が際立つ一章である。

第五章「張資平の恋愛小説と「病」」は、男の肺結核、女のヒステリーと性病の描写を精密に分析する。当時の新文学において、往々にして肺結核がロマン化される傾向にあったのとは異なり、張資平は肺結核を醜悪な身体性を伴って描くと同時に、性病がもたらす身体的苦痛を、驚くべきリアリティを伴って活写する。それは論者が第一章で論じた張資平の冷徹な観察眼を端的に示すものである。張資平は、性的放縦を、道徳ではなく身体的苦痛によって裁こうとするというのが、論者の見立てである。結論として導かれる、男の性欲は常態で女の性欲は病態という指摘も、独自性に優れ興味深い。

終章では、張資平の身体への眼差しに、身体をセクシュアル化する男性の視線と、女性の身体が過酷に虐げられる実態を暴き出す視線、この二重性が存在することを明らかにする。他の章と比較すると、若干議論が駆け足の印象は拭えないが、論文の表題に帰結させる構成力は見事である。これにより、身体を私的なトポスに回帰させる系列の作家として張資平を位置づけ、彼の文学がもつ新たな意義を提示し得たといえよう。

このように優れた本論文ではあるが、今なお未解決の課題は残される。女性の身体に注がれる視線の二重性は明確になったが、男性の身体に注がれる眼差しについての議論が不十分であることや、張資平の観察眼が発揮される文体上の特質について議論がやや曖昧であることなどがそれである。さらに、論文中で言及する「苔莉」に配置された劇中劇の解釈や、身辺小説群を一つの連作として読む見方についても、より踏み込んだ分析が必要であろう。しかし、これらの不足を補う論文は論者自らが構想中であり、近い将来、納得できる見解を示してくれるものと期待する。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。令和6年7月4日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。